

まちかど・ズーム IN!

おもちゃの病院



物を大切に

白石工業高校機械部の生徒たちが8月1日、いきいきプラザ2階に「おもちゃの病院」を開設し、壊れたおもちゃの診察・治療に当たりました。
生徒たちが子供たちとふれあいながら、物の大切さを分かってもらおうと始まったこの病院も今年で3回目。今回は、配線の切断などで動かなくなった車、飛行機など約30個のおもちゃが持ち込まれました。
生徒たちは、はんだごてなどを使って手際よく修理。また、その場で直らないものは持ち帰って修理する「入院治療」を受け、5日に子供たちに渡されました。

白石夏の風物詩復活 夏まつりで、流しうーめん



白石夏まつり初日の8月11日、中町特設会場で昭和58年以来、18年ぶりに「流しうーめん（奥州白石温麺協同組合主催）」が開かれ、約250名の市民などでにぎわいました。
恒例の「白石音頭パレード」も11日に行われ、市内の企業や子供会など20団体が参加。工夫を凝らした白石音頭踊りや、仮装した市民たちが祭りを盛り上げました。



願い事を短冊に

北白川駅に七夕飾り

7月29日から8月12日まで、北白川駅待合室の入り口に七夕飾りが2本設置されました。
飾り付けをしたのは、駅近くに住む方々で組織するボランティアグループ「六美会」のメンバーと、白川保育園の4・5歳児14名。青竹に短冊や折り鶴をつけて、昔ながらの素朴な七夕飾りを完成させました。
また、待合室には白紙の短冊が置かれ、駅の利用者は、短冊に願い事を書いてササに結び付けていました。



出来栄は上々!

親子木工教室

夏休み工作の宿題を作りながら木に親しんでもらおうと、中央公民館で8月5日、親子木工教室が開かれました。
これは、大工、とび、左官などで組織する白石市建設職組合の青年部が主催したもので、今年が5回目。参加した150名の親子は、大工さんたちの指導を受けながら、のこぎりや金づちなどの大工道具を使って巣箱や本立て、ちりとり、いす作りなどに挑戦し、自分で作る楽しみを味わいました。



鍛えた技を競い合う

登別市と少年スポーツ交流



姉妹都市登別市と白石市の少年たちによるスポーツ交流事業武道大会が8月5日、白石高校第二体育館で行われました。
両市から選抜された68名の選手が柔道、剣道、空手の種目に分かれて出場。家族や指導者などからの盛んな声援を受けて、日ごろ鍛えた技を競い合いました。
試合前日には、登別市の子供たちは白石市の子供たちの家庭にホームステイし、白石城などを見学しながら交流を深めました。

みなさんからの素敵な情報を待ってます!

パソコンで名刺ができちゃった 「アテネ」オープン3周年イベント



情報センター「アテネ」がオープン3周年を迎え、7月20日から22日まで記念イベントが開かれました。
パソコンお絵かき大会、インターネット体験会、パソコン何でも相談会などに親子連れなどが参加し、マルチメディアを楽しく体験しました。
大勢の子供たちが参加した名刺づくり体験では、学校名や名前のほかに、「よろしくネ」などとあいさつの言葉を入れるなど、個性的な名刺を作って友達と交換していました。

いっぱいつかんだよ!

長袋山根地区「ふれあい活動」

福岡長袋の山根地区で7月22日、子供たちが魚のつかみ捕りなどを体験する「ふれあい活動」が行われ、約600人の親子連れでにぎわいました。これは、地元の青年組織「山根青年交流会」が主催したもので今年で9回目。天津沢川に放した約1,100匹のニジマスが小学生たちが歓声を上げながら追いました。このほか、金魚すくいやゲームなども行われ、楽しい夏休みのスタートを切りました。



七月二十一日、二十二日と札幌を訪問した。白石村開基百三十年にあたるため、ぜひひとのお招きがあったからである。白石区役所には大変な気配りをしていただき、どこか行きたいところがあるならば御案内したいと言われ、岩内町に行きたいとお願いをした。

昭和二十七年に父を亡くして以来、毎年十二月ごろ、集金のために北海道へ通い続けた。函館本線の小沢駅から岩内線に乗り換えて岩内港に着く。そこにはあべ青果店という取引先があった。

あれは何年のことであつたらうか。夕飯の後で時間を持て余したので、駅前のバーに出かけた。吹雪の夜であった。進駐軍払い下げのオーバーを着て、マフラーを



川井市長の
せせらぎトーク

白石村開基百三十年

頭からかぶり、雪が吹き込まないよう二重になつて入ると、石炭ストーブのそばにホステスがたつたひとりと、ぼつねんと座つて編み物をしていた。
お客は誰もいない。「トリスのウイスキーを一杯」と言つてカウスターに座ろうとしたら、「お客さんこちらの方がいいですよ」とストーブのそばに誘つた。よもやま話をしていたら、今日このバーを辞め、明日はふるさとの土地に帰ると言う。小一時間もいたであらうか。

翌朝、岩内駅に行くのを掛けてくる女性を見た。厚化粧を落とした昨晩の彼女である。(ああ、故郷に帰るといふのは本当だった)と思ひ、雪国の叙情を感じた一瞬だった。
しかし、既に岩内線は廃線となつていて、残念ながら取りやめにした。夜には盛大な歓迎会を催していただいたが、その席で大失敗をしてしまった。
「白石区は、来るたびに発展しており同慶に絶えませんが、私の友人に、頭はあまり良くありませんが、お坊ちゃんが集まる大学の学長をしている男がおります。彼に言わせると、優秀な人間は明治維新の際にすべて白石区に行つてしまつた。その証拠に、白石区からは学士院会員が何人も出ていますが、わが白石からは誰も出ていないということですよ。」とあいさつをした。

乾杯の後で、白石区ふるさと会副会長の佐々木正さんが名刺を出されて、「私、先ほど市長が言われた頭の悪い大学を卒業いたしました。」と言う。「あれは冗談ですか」と平謝りに謝つたら、札幌市の助役には、「この辺では、うっかり大の悪口は言えませんが、道内には五百人以上の出身者がいるはずですからね。」とやられて冷や汗を流した。
名譽挽回をしよう。小泉総理が言い出してから、「米百俵」がよく話題になる。維新戦争で敗れた長岡藩に送られてきた百俵の米を、若き家老小林虎三郎は、「この百俵の米は食べればそれで済みである。これをもとにして学校を造り、有為な人材を育てるべきである。」と主張し、実行したという話である。
我々の先人が佐藤孝郷に率いられて、最月寒(白石村)へ入つたのは、旧暦で明治四年の十一月である。そして、翌明治五年の三月には早くも善俗堂学問所を開く。今の白石区白石小学校の前身である。
ここまでは私も知っていた。しかし、この善俗堂学問所が、今の札幌市で二番目に早くできた学校であることは初めて知った。我々の先人はかくも偉大だったのである。